
スカウトマン

華菜恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スカウトマン

【Zコード】

N1627D

【作者名】

華菜恵

【あらすじ】

マヤがスカウトの男にハマり、夜の世界に飛び込んでいくお話です。

「今から遊びに行くの?」

仕事の帰り道知らない男が声をかけてきた。
見た目からして遊んでそうな・・・。

「今何か仕事してる?」

いつもこつむ。

駅を出るとこいつやってスカウトやキャッチに声を掛けられる。
いつもなら無視して早歩きして帰るんだけど、この時は違った。

好みの顔だったからだ。

キヤバクラでの仕事に興味はないけれど、携帯の番号を教えた。

「君名前何てやつの?」

「マヤ。」

「マヤちやんかあ。

可愛いくてねえ。俺はヒロキ。よしひね。」

可愛いとか誰にでも言つてるんだと黙つたび、少し照れた。

「今日見学だけでもして〜?」

「う、うう。」

もちろん働く気なんてさらさらない。
でも、もう少し話していたかつたのだ。

「駅からも近いし、うちの店キレイで広いだろ?」

「や、そうだね。」

「もしかして、緊張してる?」

「ちょ、ちょっとね。」

「ひつひつ仕事つて初めて?」

「うん。」

「そつか、まあ何でも相談に乗るから大丈夫。
皆いい人達だし、俺もフォローするからね。」

「う、うん。」

働いてもらいたいから優しいんだよね。
わかってても、優しい人などと勘違いしてしまってううになる。

「今日はもう帰るね。」

「うん。また連絡するから、電話出でよ?」

「うん。じゃあね。」

少し店を見せてもらつて私は帰つた。

連絡・・・。

仕事のことと連絡してくるだけだよね。

家に着くと早速ヒロキから電話がかかってきた。

「もしもし。ヒロキ君?」

「うう。今日どうだった?」

いい店だろ?「

「ま、まあね。

でも、私なんかが働けるような感じじゃないかな・・・。」

「何言つてるんだよ。

俺可愛いって思った奴にしか声かけないし、マヤはスグ可愛いぜ?

「そ、そつかな?」

信じてしまいそうになる。

私はそんなに自分に自信もないし、店にいる子は皆す、よくキレイで
私なんか完璧に場違って感じだったのに。

「明日も、体験でも大丈夫だから働いてみない?」

「む、無理無理!」

そんな急に・・・心の準備とか・・・。」

「やつだよな。ゴメンゴメン。

じゃあ、とりあえず、不安なこととか何でも話し聞いてやるから

明日メシでも行かねえ？

メシ？

普通に仕事しなくても会えるんだ・・・。

「わかった。いいよ。」

もちろん返事はオーケー。

仕事に興味なんかない。

あるのははヒロキに会いたいとゆつ氣持ちだけ。

「じゃ、明日七時に今日声かけたところで待ち合わせな。

電話を切つて、私は明日何を着ていくか悩んだ。
やっぱりああゆう人はギャルっぽいのが好きなのかな。
女の子らしくした方がいいのかな。

色々考えた結果少し派手な服を選んだ。
買つてずっと眠つてた服だ。

緊張する。

ご飯つて何食べに行くのかな。
食べやすいものがいいな。

何考えてんだる。

仕事の話しに行くだけなのに・・・。

今日まちつ寝よつ・・・。

朝起きるとヒロキから着信があった。

「もしもし、朝電話した？」

マヤは掛け直した。

「うん、今日の約束覚えてるかなと思つて。」

「覚えてるよ。」

「そんな訳ないじゃない。」

「そか、そか。

じゃあ、待つてるからな。」

「今日仕事か？」

「う、うん。」

「五時までね。」

「頑張れよ。」

「疲れてしんどかったら、今日はナシにしてもいいからな。」

「やつぱり優しい人……。」

「ありがと……。」

ヒロキからは確認の電話だつたみたい。
電話で話してゐるだけでドキドキする。

。 ただ、 顔がタイプなだけで好きとかそんなんじゃないんだけど・・・

「あ、用意しなれや。」

マヤは仕事に行く準備をした。

マヤは中学の卒業と共に地元の喫茶店で働いている。

「おせむりじやうこせやーーー。」

「アヤツが死んで、あざむく。

今日も忙しいから早く着替えて手伝つてちょうだい。」「

モーニングはいつもこんな感じ。
朝から途切れる事なくずっと忙ー

「マヤちゃん、休憩行つていいわよ。」

店長だ。

この店の店長は女人で、結構美人だ。
それに、マヤには特別優しい。

「ふう。」

一
アサヒ
なん

今日もモーニングお疲れ様。

「これは、同じ喫茶店で働くココちゃん。

昔はキャバクラで仕事したとか……。

「ココちゃん。

キャバ嬢でどんな仕事をするの?」

「え?

「マヤちゃん、お金困ってるの?」

「いや、そんなんじゃないけど……。
どんな仕事してるのかなって思つただけ……。」

「ん~……。

お密さんと喋つて、お酒飲んで……。
まあ、難しいことはしないけどねえ。」

「やつかあ。

ココちゃんはどうして辞めたの?」

「好きな人出来てね。

お密さんだったんだけど、仕事辞めて付き合つてくれつて言われた
の。」

「お密さん?..」

「やつやつ。

まあ、ほんとおつさんばつかなんだけど、たまに若い人が来たりもすんのよ。

最初はむちゅんお密さんだけだったんだけど、一緒に話してゐつ

ちいびんどんね・・・。」

「何か素敵ね。」

「彼はね。たまたま。

そんないいお密さんばかりじゃないわ。

平気で胸触る人もいてるし。

年齢を偽ってる人とか、夜の世界は嘘がつき物つて感じ。」

「・・・。」

「あれ、まじにキヤバ考えてた?
辞めた方がいいわよ。」

あんなの、お金に困った人がする最終手段。
まともな子が働いてもすぐ辞めるのがオチよ。」

「そんな・・・。

働くだなんて、そんなつもりは・・・。」

「何がありそうね。

まあ、その辺のことならユリに相談して。
いつでも話聞くからさ。
じゃ、休憩終わりだから行くね。」

「あ、うん。
お疲れさま。」

最終手段か・・・。

そうだよね。

そんな楽な仕事ならあんなに給料もいいハズないし、眞してるとわよ

ね。

仕事しよ・・・。

マヤは仕事に集中した。

キャバクラで働くヒロキに毎日会える。

ヒロキも喜ぶ。

もっとヒロキを知りたい。

ヒロキのことが頭から離れなかつた。

パート2

「お疲れ様でしたあ……。」

「やつと今日の仕事も終わり。
いよいよヒロキとトーントーか。
緊張するーーー！」

「マヤちゃん……。」

「ユウちゃん……。」

「おつかれ。

今からコーヒーでもどう?

「あ、今日約束あるんだ……。
またね。」

「そ?

何かあつたら一人で考えないでちやんと相談してよ?」

「ありがと……。」

ユリちゃんは心配してくれてるみたい。
でも、まさかスカウトの人が気になるから……なんて言えない。

ユリとわかれでマヤは真っ直ぐ家に帰った。

喫茶店では髪を結んでいたので、ほどくとパムの後が付く。

「「」さんなんで会えな「」ってば。」

ママはシャワーを浴びて髪をコテで巻いてみる。

「つまく巻けないんだよね・・・。」

「コテは持ってるけど、つまく巻けなくてほとんどの使ってなかつたのもあってやればやる程髪はぐちゃぐちゃになつた。」

「やっぱリストレートした方がいいかな。」

諦めてアイロンで完璧にストレートにした。
化粧もいつもより濃く派手にした。

昨日決めておいた少し派手な服に着替えてヒロキとの待ち合わせ場所に向かつた。

プルルルルルル・・・

ヒロキからだ。

「もしもし?」

「あ、俺~。」

今から出るけど、今日大丈夫かあ?」

「うん。もう私は家出たよ。」

「まじ?」

じゃ、俺も急ぐわあ。」

「急がなくても大丈夫だよ。
待ってるから。」

「バカ。

俺は女を待たす男は嫌いなの！！
しかも、マヤみたいな可愛い奴一人で待たせてたら変な奴にナンパ
されんだろ。」

「まさかあ！」

ヒロキは結構男らしいところもあるんだ。
てゆうか、ナンパされたら嫌なのかな？
ちょっと期待しちゃうじやん。

マヤが待ち合わせ場所に着くとヒロキが走って来た。

「フリイ、待たせちゃったなあ。
誰にもナンパされてないだろ？」

「今着いたトコだよ。

そんなに走つて来なくても大丈夫なのに・・・」

「走つても死ぬ訳じゃねーんだから、待たすよりいいだろ。」

「バカみたい。アハハ。」

「ハア？」

ヒロキは優しい。

とゆうより、ヒロキといふと自分は女の子なんだって思える。

「何食う?」

「え、あ~何でもいいよ。」

「今日は俺のオゴリだから好きなもん言えよ。
今日だけ特別なあ。」

「え、今日だけ?」

「おう。

今日は初回サービスでーす。
次回からは有料になります。
なんつって~。」

またデートしてくれるんだ・・・。
だつたら有料だらうと何だらうとかまわない。

「まあいいや。

何がいい?

俺、腹減つてヤベーから早く決めろよなー。」

「じゃ、じゃあ・・・。

オムライス!~!」

「はははは。

女はオムライス好きだよなあ。

寿司とか言われたらどうしようか思つたよ。」

二人は近くのオムライス専門店に入った。

「ヤベー。

「この雰囲気マジ俺苦手。」

「いじめん。

「違つて店にする?」

「マヤが食いたいもんだから我慢する。

初回だし?」

「何それ。」

「冗談、冗談。

「マヤが食いたいなら苦手な店も我慢できるって事だよバーカ。」

どうゆう意味?

何でそんな期待させるよ!」
「…。

好きになつつけ! 『じやない。』

「俺、変わつたもんて苦手なんだよね。
だからオムライスはやつぱケチャップの…。
つてな! 『じやん!』」

「専門店とかだとあんまり置いてないよ。
これを機に変わつたやつ食べてみたら?
結構美味しいんだよ?」

「ん~。

多すぎでよくわかんね。」

「俺マヤと同じでここよ。」

「私、キノコとサーモンのホワイトクリームソースにするけど、キノコ食べれる?」

「なんだよそれ。

キノコもサーモンも食えるけどマズそうだな。」

「じゃ、違うの?」

「いや、マヤと一緒に。」

「そ?」

「じゃ頼むよ。」

店員さんを呼んで二人同じのを頼んだ。
何かカツプルみたい・・・
そう思つてのも私だけなんだろうな。

「不安?」

「え?」

「キャバクラ。」

「そ、そりゃあね。

私、今働いてる喫茶店でしかバイトとかした事ないし。」

「へえ。

まあ、そんな経験のなさが逆にウケたりするもんだよ。
キヤバはさ、人と人だから賢いとかバカとか関係ないんだ。

要は客がマヤとまた話したいって思つか思わないかつてだけ。」

「どうしたらいいの？」

「そんなの皆のオリジナル。

マーベルなんてないんだからさ。

マヤが色んな客に合わせて色んな人間に変身すればいい。」

「変身？」

「そりゃ。

楽しくワイワイ飲みたいタイプの客だつたら元気な明るいタイプの人間になるとか、

悩み抱えた客だと、必死に相談乗るとかわ。

逆に悩みを忘れられるように楽しく過ごしてやるのも有りだと思うし。

マヤがその客の求めてる「とにかくあげてひと時の夢を見せてあげる、って感じかな。」

「そんなの・・・。」

「そんなに難しく考えないで。

友達と喋ってるのと同じでいいんだよ。」

「友達と？」

「うん。

友達が悩みあつたら、励ましたり相談乗つたりするだろ？
それと同じだよ。」

「そっか。

でも、胸とか触られたりとかあるって聞いたんだけど・・・。」

「基本的にキヤバではお触りは禁止。

ボーイが止めてくれるから心配しなくて大丈夫だつて。
それでもダメなら俺がぶつ飛ばしてやるから。」

「ばーか。」

ヒロキが助けに来てくれるなら胸触られてみたいかな・・・。

「お待たせしました。」

注文していたオムライスがテーブルに置かれた。
キノコたっぷりでとてもおいしそう。

「うわ〜。

ソース白色じやん。

牛乳かよって感じ。」

「まあまあ、食べてみなよ。」

「いただきますっと。」

「……」
ヒロキは戸惑いながら少しだけオムライスを口に入れた。

「どう?」

「んまい！！」

ヒロキは満面の笑みでオムライスをほつばつた。

ヒロキってこんな顔して笑うんだ。

チャラチャラした見た目とは違つて少年のよつた笑顔。
ずっと見ていたくなるよつた・・・そんな笑顔。

「何見てんだよ？

そんな見られたら食いにくしだろー。」

「ごめん。

笑つた顔初めて見たから・・・。
意外と可愛いんだなつて。」

「か、かわいい！？

バカにすんなよ。

てゆうか、早く食えよ。

冷めんぞ。」

「誉めてるんだよ？

氣悪くした？

「めんね。」

「そんなんじやねーけど、男つてのは可愛いって誉め言葉になんねーの。」

「アハハハ」

ヒロキとこるとたわいない話も夢のように楽しかった。

「うみのをキャバクラでお客さんは求めてるんだろ？
こんなに楽しく話してお金貰えたらどんなに乐だろう……。
キャバクラで働くのも悪くないかな。

ヒロキがいつでもこうやって相談に乗ってくれるなら安心だし……。
。

「うみやまでした。」

「おひ。」

「考えたんだけど、明日体験行つてみようかな……。」

「まじ？！」

「大丈夫なのか？」

「うん。

頑張れそうな気がするの。」

「……。

ならや、俺ずっと店内いてやるから何かあつたらすぐ言えよ。
帰りたくなつたらすぐ帰つていいからさ。」

「ありがと……。」

皆にもこんなに優しいのかな……。
やつぱり期待しちやうよ。

「今日は送るよ。」

「大丈夫だよ。」

家近いから。」「

「ナンパされたらいやなんだよ。何度も同じこと言わせるな。」

ナンパされたのが”イヤ”??
何で?

「とりあえず帰るわ。

明日も朝から仕事なんだろ?

早く寝て、夜まで体力残しとけよ。」

「う、うん。」

ヒロキは家まで歩いて送ってくれた。

「じゅ、明日また連絡するから。」

「うん。」

ありがと。」

ヒロキと分かれてマヤはキャラクターのことなど頭になかった。
ずっとヒロキの顔が頭から離れない。

私ヒロキのこと好き・・・なのかな。

そんなことを考えてる内にマヤは眠ってしまった。

決意

ジココココココ・・・

「あ、――――――――!

昨日のまま寝ちゃったんだ!

シャワーして朝食を食ないじゃん!――!「

マヤは急いで用意して喫茶店に向かった。

「おはようございます!――!」

「マヤちゃん、今日は寝坊かしら?

遅刻じゃないからいいんだけど、急いでね?」

マヤは急いで制服に着替えて仕事を始めた。

「マヤちゃん、マヤちゃん休憩は同じだ。

大概是ココちゃんと休憩は同じだ。

「ココちゃん、お疲れ様。」

「おつかれ!

てゆづか、マヤちゃん彼氏いたんだね。」

「え?」

「昨日、朝前のお店でギャル汚どリードしてたじゃん。」

意外だよね。

ああゆうのがタイプなんだ?』

「あ、彼氏じやないよ。』

「やうなの?

もしかして、ホスト?』

「違うよおーー!

ホストクラブなんて行つた事ないし···。』

「なんだ。

ホストに貢いでキャバなのかと思つた。』

「友達!』

「へえ。

あんな友達いたんだあ?』

『つは明らかに怪しんでる感じだつた。

「ま、まあね。』

「といひでや、キャバまじに働くの?』

「だから、働くとかじやなくつて···。』

「正直に言つなよ?』

別に誰にも言わないからさー。』

「つむぎさん」に言つてみよつかな。

キヤバで働いてたから何でも教えてくれそつだしね。

ヒロキ君の「ひとは」わなきやいこんだよね。

「実はね・・・。

この前スカウトされたやつで、ちょっと興味があるつて言つたから・・・。

「

「やつぱりね。

スカウトの言つた事なんてほとんど嘘だと思つなよ?

働く働かないはマヤちゃんの自由だけど、店選びって肝心だし。」

「嘘つて?」

「スカウトしたが、紹介してその店で女の子が働いたりお金貰えるんだよ。

だからあれやこれや言つて誘い込むの。色使うのも多いみたいだしね。」

「色つて?」

「ん~。

簡単に言つと、氣があるフリして相手をその気にさせるみたいな感じかな。」

「え・・・。」

「もしかして?」

「マヤちゃん色使われて働くつて思つたの?」

「そんなんじやないけど、わかんない。
いい人だとは思うけど・・・。」

「バカじやない?」

そんなのに引つかかってたらいい恋出来ないぞ?」

「そんなんじやないよ。
ほんと!」

「ま、相談なら乗るからさ。」

やつとコリは仕事に戻った。

色・・・?

やつぱりね。

あんなにカツコイイ人が私のことなんてね・・・。
わかつてたことだけじ、やつぱりちょっとシヨック。

「お疲れ様でしたあ。」

「マヤちゃん!..」

「コリちゃん。」

「「一」行ぐ?」

「「一」めん。

今日キヤバクラの体験行くの。
一日だけだから。」

「そ？」

「あら、無理しちゃダメだよ？」

「あらがと。
じゃあね。」

不安なまま帰宅してシャワーを浴びた。
今日はせっぱり断りう。

フルルルルルル

お風呂場を出るとヒロキから電話が鳴った。
フルルルル・・・・・・・・。

マヤは電話に出なかつた。
もう、このままおとならしよつ。

それからヒロキから電話が鳴る事はなかつた。
マヤはちやんと断れば良かつた。
そんな後悔をしながら歸つてついた。

朝起きると、せっぱりヒロキからの着信はなかつた。
忘れよつ・・・・。

仕事の準備をして今日も喫茶店に向かつた。

「おまよつ、マヤちゃん。」

「あら、マヤちゃん。」

おはよ'。

元気ないわね？」

「店長……。」

「でも、仕事は別だからね。
笑顔、笑顔！！」

「はい……。」

休憩時間。

今日もココと一緒にだ。

「昨日体験どうだった?
まあ、見るからに想像と違つたみたいな感じだけど。」

「昨日体験行かなかつたの。」

「何でえ？」

「不安になつちゃつて……。」

「ははは。

それでいいんじゃない？

無理してしなきゃいけない訳じゃないしね。」

「そり、だよね。」

「じゃ、今日は「一ヒー付き合つてよね？」

「うん……。」

仕事が終わり駅前の喫茶店に向かつた。

「あ……。」

ヒロキがあの時と同じようにスカウトをしていた。

謝らなきや……。

「ユリちゃん、先入つて。」

「はあーいよ。」

ユリはちゅうと呆れた顔をしながら喫茶店に入った。マヤはヒロキの方へ走つて行くとヒロキはマヤに気づいて手を振つた。

「昨日は『めんなさい』！」

「おー。」

急に不安なつたかあ？」

「う、うん。」

「やつぱり無理してたんじやん。

無理しなくても、まじで大丈夫になつてからでいいんだよ。そんな焦んなよ。」

「怒つてないの？」

「そんなんで怒るかよ。

マヤが不安な気持ち知つてゐるし。

「ホント?」『めんなさい。』

「まじ、怒つてねえって。

それより、マヤともう会えないので思つた。

「嘘ばっかり……。」

「嘘だつて〜?!

そんなん聞いてどうすんだよ

「色……使つてゐんぢょ？」

「はあ？」

備はアスリットありせん

で驚か もしかしてそれで時田がなかがのが

• • • o

「あはれ」。

ま、こんな仕事してる奴すぐに信用出来ねーわな。」「

• • • o

「なあ、俺とまたメシ喰いに行つてくれよ？」
「まじ、それだけでいいし。」

「何で？」

「そんなの意味ないじゃん。」

「あのオムライス【】かつたし、マヤが【】いつて思つもん食いたい。俺メジャーなやつしか食つてなかつたからさ、もつと色々なもん食つてみたくなつてさ。

マヤなら色々知つてそうだし。」

「ほんとにそれだけ？」

「疑うのは勝手だけどよ、俺が一人であんな店入れねーだろ？」

「あはははは。」
「それもそうだよね。」

「やつぱり楽しい。」

「ご飯食べに行くだけ……。」

「仕事抜きでもいいんだ。」

ヒロキはコリちゃんが言つてた人とはきっと違つ。

「また連絡してもいい？」

「もちろん。」

「あ、そろそろ行かなきや。友達待たせてるんだ。」

「了解！」

「またなー！」

「ナンパされても付いてくなよー。」

「はいはい。」

マヤは小走りでコリのところへ駆け寄った。
コリはこわいこわい声で「ヤー、ヤー」として待っていた。

「アサヒサム」

「あれ、前一緒にいたギャル汚だよね？
やつぱり好きなんじやないの？」

「そんなんじや・・・。

連絡してなかつたから謝りたかつただけだよ。

「ま、それならいいんだけど…」

ユリはアイスコーヒーに手をかけた。

すると、喫茶店の店員がマヤのテーブルに氷の入った水を静かに置いた。

「あ、
私カフエオレ下さい。」

マヤはすかさずカフェオレを注文した。

このコーヒーは特別苦い。

普段はアイスコーヒーを迷わず頼むマヤでも、ここではこつもミル

クたつぱりのカフエオレを頼むのだ。

「体験くらこなら悩む必要はない」と語つよ。

「え？」

「コリはなかなか本当のことを言わないマヤに後押しをするかのよう

に言つた。

「体験はさ、嫌んなつたら帰ればいいし。

何より一回行くだけで次からも自分の行きたい日に行けばいいだけ

じゃん。

嫌ならもう一生行かなくてもいいし。

小遣い稼ぎに体験ばっか行つてる子も多いみたいだよ。」

そつやくコリはマヤの顔をじつと見つめた。

どうやらマヤの反応を見ていくみつだ。

マヤが口ごもつている間にコリはタバコに火を付けた。

メンソールの香りがテーブルに広がつた。

「コリちゃんタバコ吸つてたっけ？」

「バイトの休憩中にコリがタバコを吸つていろをマヤは見たことがない。

「辞めてたんだけど、喫茶店とかではついた。

「コリは三口程吸つてタバコの火を消した。

「そうなんだ。

おいしい？」

マヤはタバコを吸つたことがない。
煙を吸うなんて考えられないのだ。

「おいしいとか、よくわかんないな。
吸いたくなるから吸う、みたいな？」

「意味不明だよ。」

マヤにはタバコを吸いたくなる気持ちなど全く理解できなかつた。

そういうえば、ヒロキはタバコ吸つてなかつたな。
ああゆうタイプの人つて皆吸つてるイメージあるの？」

「あのギャル汚に吸わせてもらつたら？」

ユリはまたいやらしくへいやいやした。

「ヒロキ君は吸わなによ。
見たことないし……。」

「へえ、珍しいね。
あんな見た目で。」

ユリも珍しく思った。

ギャル汚は元やんちゃだった子に多いからだ。

「とりあえずさ、体験くらうならユリも一緒に行つてあげるから
人で暴走すんなよ？」

「ユリちゃん・・・。

ありがと、でも彼氏さんご怒られちゃうでしょ？」

「バレなきや大丈夫よ。

一回くらいならね。

やましい気持ちで行く訳じやないんだし。」

ユリはきつぱり言い切った。

「ほんと、大丈夫だから。
何かあつたら相談乗つてよ？」

「そ？

いつでも、言つてよね。」

ユリは自分の知つてることになるとすく協力しようとする。
中学の頃からやんちゃくれで、高校にも行つていながら誰かに頼
られたいのだ。

二人は楽しくバイトの話やユリの彼氏の話、時間も忘れて喋った。

「もうこんな時間？」

「早いね。」

慌てて一人は店を出た。

ヒロキはもうそこにはいなかつた。

マヤは少しガッカリしながらユリとわかれだ。

家に着くともう一時を待っていた。

「お風呂入つて寝よつ。」

マヤがお風呂に入る準備をしてると携帯が鳴った。
「ロキからだ。

「も、もしもし。」

「あ、俺。」

ちやんと家帰つたかあ？」

ヒロキの優しい声。。。

マヤはこの声を聞くと正座になつてしまつ。

「今帰つたとこだよ。
ビビつたの？」

「ん~？」

声が聞きたくなつただけ。
無事に家着いて安心した。」

「子供じゃないんだから。」

マヤは心配してくれるのが嬉しかつた。

「そか、じやまた明日連絡するから」と云つた。

「あ、うん。」

マヤは申し訳ない気持ちになりながらも、また明日ヒロキと話せる
ことを嬉しく思った。

緩みっぱなしの顔のままお風呂に入りキャバクラの体験に行くこと
を決意するのだった。

「ちゃんと考えたんだけど、体験行こうと思つた。」

「バイトでの休憩中、マヤはユリを真っ直ぐ見ながら少し小声で言った。

ユリは少し驚きつつもすぐにぱぱっと全てを見通してたかの様な顔で答えた。

「マヤちゃんが決めたことならユリは何も言わないよ。」

「これからも相談とかするかもだけど聞いてくれる?」

マヤは少し心配そうにユリに聞いかけた。

人に頼られるのが大好きなユリは「もちろん。」と優しく笑つた。

仕事が終わりマヤはヒロキに体験に行くことを告げた。
電話の向こうから心配しながらも心強い声が聞こえた。

ヒロキ君がいるなら大丈夫。

ヒロキ君が喜ぶなら・・・。

マヤは自分でも驚くくらいヒロキに惹かれていた。

ヒロキになら裏切られてもいい・・・。

心のどこかにそんな気持ちまで生まれていた。

電話を切るとマヤはシャワー室に飛び込んだ。

仕事の前にヒロキと食事に行く約束をしたのだ。

ヒロキがおこしこと言つてながらオムライスを食べた姿がまだ田に焼
きつこたままマヤの顔こは一瞬の迷いも不安もなかつた。

マヤは前と同じ様に濃いメイク、少し派手な服を着て家を飛び出した。
マヤが待ち合わせの場所に着くと、ヒロキが手を振つて駆け寄つて
きた。

「今日も可憐ござん。」

「ヒロキ君の笑顔には負ける。」

マヤは照れながら軽く流した。

そしてまたオムライスの専門店に入った。

「今日もマトマトマース系とかどう?」

「マート苦手なんだよなあ・・・。」

ヒロキが渋い顔をする。

「まあ、オムライスに合わなくもない感じだし食つてみるかー。」

「これを機でマトマース系もアタマアタマーベルーしたら?」

「あれ、オムライスに合わなくもない感じだし食つてみるかー。」

「お、男らしいね。
じゃあ、私力レーソースの頼むから食べなかつたら交換つてことこ
しよつか？」

「そんないらね~。

マヤが食べて俺が食えねーとかカツコ悪いし食つから心配すんな。

そう言つとヒロキは店員を浮び、強引にトマトソースのオムライス
を二つ頼んだ。

「後悔しても知らないんだから。」

「お待たせしました。」

ヒロキとマヤが他愛無い会話をしているとオムライスがテーブルに
運ばれた。
トマトソースの匂い香りがする。

「お、意外とうまやつーーー。」

ヒロキはまづヒロキとオムライスを一気に呑み込んだ。
すぐに渋い顔になる。

「どう?」

マヤが心配そうに聞く。

ヒロキは少しとまどいながら「ヤバイ。」と答える。

「だから言つたのに・・・。
違つての頼む?」

マヤは少し呆れながらも心配そうに尋ねる。

「大丈夫。食えないほどじやねーし。」

ヒロキはまたオムライスをほつばる。
やつぱり渋い顔をする。

「ヒロキ君て強がりなんだね。」

「当たり前。

男が女の前で強がんないと女が弱くなれねーだろ?」

たかが、食べ物ひとつで強がるヒロキがマヤには男らしく、
そして頼りに見えた。

それからヒロキは黙々とオムライスをほつばつては苦い顔をした。
マヤはくすくす笑う。

「「」ちやー やん!」

マヤが半分くらい食べたところでヒロキが食べ終わる。
口に合わないから一気に食べたのだろう。
この前より食べ終わるのがずいぶんと早かつた。

「マヤってロスに似てんなー。」

ヒロキがマヤをじっと見つめながら囁く。

「何が？」

「なんで？」

「食いモンほっぺにためすぎ。」

「そんな見ないでよ。食べにくい……。」

マヤは恥ずかしくなつて食べるのをやめた。

「悪い。」一言謝るとヒロキは遠くを見つめた。

マヤが食べ終わるとヒロキがマヤの方を向いて“本題”に入った。

「今日どうする？」

「頑張れるよ。

いつまでもこんなじや意味ないじやん。」

「わかった。」

そう言つとヒロキはどこかへ電話をかけた。

どうやら相手は仕事先の人なのつだ。

急に不安が押し寄せる。

そんなマヤに気づいたのか、ヒロキは口パクで「大丈夫だから。」

とウインクした。

不安な気持ちが少しづつ解けていく。

電話が終わり一人はレジに向かう。

「マヤが財布と出すと、ヒロキが一万円札をレジに置き、「一緒に」と店員に言いパッパと会計を済ませ店を出た。

「早くしまえよ。バカマヤ。」

「でも、オゴリは初回だけって・・・。」

「冗談も通じねーの?」

「誰が女に金出さずかつての。」

ヒロキが笑う。

マヤは少し申し訳なさそうに「少し馳走様。」と言つた。

そしていよいよキャバクラに行く時が来た。

夕食（後書き）

次回、こよこのみやがキャバクラレビューです。
読者の皆さま、どうぞマイを応援してやって下せー（。 - - -)

二人は満腹なり、すぐに店に向かつた。
店の前でヒロキが振り返つた。

「本当に大丈夫か？」

ヒロキが心配そうにマヤに問う。

「まかせてーー！」

マヤは強い意志をもつて答えた。

ヒロキは納得したかのようすに笑みを浮かべ店内に入った。
店内は薄暗く、客とキャバ嬢の声でにぎわっていた。

前は働く気などなかつたマヤは店内とちゃんと見ていなかつたのだ。
テクノの音楽が小さく店内に響いていた。

たくさんの人でにぎわつてゐるが落ち着いた雰囲気がある。

マヤが店内を見渡してみるとヒロキが手招きした。
それに気づくと早歩きでヒロキの元へ急いだ。

そこには長い髪の23歳くらいの男がグラスを洗つていた。

「今日体験で入るマヤちゃん。」

マヤはその男に軽く会釈する。
すると男は手を止めマヤに微笑んだ。

「俺は「」のボーイのマサコキ。

よろしくね。」

「ビ、ビツモ。

マヤです。

よろしくお願ひします。」

緊張してこらからか、自然と声が小さくなる。

ヒロキが奥の部屋からまた手招きした。

マヤもそこへ行くとそこには大きい鏡に全身鏡。テーブルにはコテや化粧ポーチが置いてある。部屋の隅にはドレスがざつと並んでいる。

「」が待機室。

待機中はここで化粧直すなり、髪セットするなりしていいから。皆汚くしてねけど、一応皆が使うところだから・・・」

「わかった。」

「それでもここなの?」

「んでも、ここにあるドレス、一応貸してドレスだから好きに使って。」

「」にあると歎むよ・・・」

「もういりん。

今日ビレにすみる?」

そこには黒い大人っぽいものから花柄の派手なものまで20枚近く

のドレスが並んでいた。

「これは？」

俺的にマヤには似合ひと思つただけだな。」

ヒロキは一枚のドレスを手に取った。

ピンク色のロングドレス。

中央は透けていて、裾に向かって広がつてゐる。

胸元にはジュエルがちりばめられていてキラキラと光つてゐる。

「可愛い！！

マヤはすぐこのドレスを気に入り、それに決めた。

「洗い場と入り口の間にトイレあるからそこで着替えて。俺ここで待つてるから。」

マヤはすぐにトイレに向かつた。

トイレは狭く、個室が二つしかない。

手前の個室に入り着替えた。

着替えが終わるとまたすぐに待機室に向かつた。

「どう、どうかな？」

少し照れながらヒロキに問ひ。

「めっちゃ可愛いーーー！」

「そう・・・かな？」

「全身鏡見てみ。」

ヒロキは鏡に目をやつた。

マヤは少し黙り込んでドレスを着た自分を見つめた。

「うわあ～。

別人みたい。」

ピンク色のドレスは童顔のマヤにはとても似合っていた。
まるでどこかの国の姫様になつた気分にさせなれた。

「俺つてセンスいいな！」

ヒロキは血通はずっと言つた。
マヤが軽く首を下に振つた。

そのとおりヒロキはマヤに5枚の名刺を差し出した。

「これ白いアコヤ名前書いて。

あ、大事な事忘れてた。

源氏名づけっつかな？」

「そつか。

キヤバクラつて違う名前使うんだよね。」

「まあ、そのままの子もいるけどね。

俺おすすめの名前あるんだ。」

「何？」

“ゴリ”。

花の名前はこの世界じゃ縁起がいって言われてて。
マヤが良ければどうかな?「

「うん。

花の名前なんてキレイ。」

「じゃ決まりだな。」

マヤは元々花が好きで、そういう名前に憧れてたとこもあった。
早速名刺にピンクのペンで名前を書く。
”ゴリ”と・・・。

その名刺には大きく金色の文字で”TIARA”と書かれていた。
このキャバクラの店名だ。

このときマヤは初めて店の名前を知った。

「TIARAって言うんだ。」

「ははは。

今更かよ?」

ヒロキが大きく笑う。

「あんまりちゃんと見てなかつたから・・・

マヤは少し恥ずかしくなつた。

するとヒロキが奥の戸棚の戸を開けた。

「財布は金庫に入れるから、化粧道具とかすぐに必要なもん以外はここに入れて。」

「分かった。」

マヤは化粧ポーチと財布。

それに携帯電話をカバンから出して戸棚に直した。

ヒロキはマヤの財布を金庫に入れてしつかり鍵をした。

「じゃ、ある程度仕事の説明するからそこの座って。」

マヤは一番近いイスに腰掛けた。

すっかり働く事を忘れていて、急に緊張が押し寄せてきた。

「灰皿は2本たまつたら交換がいいでの基本だから。」

簡単な仕事の説明を終えるとヒロキはマヤの頭をなでた。
まるで、マヤの緊張をほぐすかのように・・・

「何かあつたらすぐ俺呼べよ。

我慢しなくていいから。」

「ありがと・・・」

頭をなでられたからか、ますますマヤは緊張した。
顔は少し赤らんでいる。

ヒロキが彼氏だったらどんなにいいだろう。

そんなことを考えていると、マサユキが待機室に入ってきた。

「新規の客来たからマヤちゃん行つて。」

「え！」

早速の接客にマヤは動搖した。

そんなマヤを察したのかマサコキは優しく微笑んだ。

「大丈夫。

一応ベテランの子つけるしフォローしてくれると思うから。」

ほんの少しだけ安心した。

そしてマヤは心に決めて待機室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1627d/>

スカウトマン

2010年10月9日23時29分発行